

# 日本における『歌集』の成立

——人麻呂の場合——

## 一

万葉集に採録された人麻呂歌集の、書物としての称呼（書名）は、次のごときものであった。

- (1) 柿本朝臣人麿之歌集（巻三1例、巻七11例、巻九5例、巻十七例、巻十一2例、巻十二1例、計27例）
- (2) 柿本朝臣人麿歌集（巻二1例、巻十二2例、巻十二1例、巻十三1例、巻十四4例、計9例）
- (3) 柿本朝臣人麿之集（巻十三1例、計1例）

右のうち、人麻呂歌集の書名として、最も本来的なものは、(1)の形であったと考えられる。それは、例数が圧倒的に多いからばかりでなく、(1)の形の場合でも、写本によっては(2)や(3)の形になっているものがあるからであり、逆に(2)・(3)の形の場合に(1)の形になった写本はないからである。すなわち、(2)・(3)は(1)の変形であって、(2)が「之」字を脱し、(3)が「歌」字を脱したものである可能性が大きいのである。かりに(2)・(3)が本来の形のままであったとしても、それが(1)の変形であるという本質に変わりはない。

渡 瀬 昌 忠

笠金村歌集や高橋虫麻呂歌集の場合にもほぼ同様のことが言えるし、福麻呂歌集は、全三例がすべて「田辺福麿之歌集」（巻六1例、巻九2例）であって、ここには「史」の姓を記さないという独自性があるために、固有の書名としての性格がいつそう著しい。

すると、万葉集以前の歌の書物には「(人名)之歌集」という書名が相当広く行なわれていた、ということになる。言いかえれば、人名と「歌集」とを「之」でつないだ書名が多かった、すなわち、「歌集」と題する書物に、それぞれのかかわる人名を冠して呼ばれたものが多かった、ということである。

人麻呂の場合に限って言えば、柿本朝臣人麿の名を冠した「歌集」と題する書物があった。そしてそれは、書式に略体の部分と非略体の部分との別があり、天・地・人および四時を基礎に置いた分類を有していた。

## 二

万葉集巻第一は「雑歌」と題されている。これは、巻第二の「相聞」「挽歌」に対する部立であり、その「雑歌」が、文選の詩の分

類における「雑歌」「雑詩」などの影響下に立てられたものであることは、先学によって指摘されている。

しかし、文選のこれら「雑」の部は、詩の分類の最後尾に位置しており、他に分類されないさまざまな歌や詩という意味をも有している。万葉集巻一の雑歌もまた相聞や挽歌に分類されない歌ども意をも持つと思われるが、それならば何故に雑歌は相聞・挽歌の後に置かれず、巻第一に掲げられているのか。巻一は内容から見て公的な場の歌であることは確かだが、「雑」に公的の意は存しないし、挽歌にも公的な場の歌が多い。なぜ「雑歌」が最初にあるのか。

わたしは、それは、古く「雑歌」という名の歌集があったからではないかと考える。「雑」の字には、「雑、五采相合也」（説文）と言われるように「いろいろのもの」がまじりあうという意味があるが、また、「雑、集也」（方言、三）、「雑、聚也」（広雅、釈詁三）、「雑、合也」（国語、鄭語注）——以上、由豆流攷証指摘——、「雑、会也」（呂覽、仲秋注）、「雑焉、総萃貌」（漢書、谷永伝注）——以上、諸橋大漢和指摘——などに見られるように、「集める」「総べる」という意味も強い。「雑歌」とは、さまざまな歌を集めたもの、つまり、ある歌の集に名づけられた書名ではなかったか。もちろん、それはさまざまな歌が一定の順序で集められたものであったろう。万葉集巻一の雑歌などから見れば、ほぼ年代順に配列されていたものであろう（相聞・挽歌が後に雑歌から分出されたものか、新たに雑歌のあとに加えられたものかについては、たぶん前者かと思うが、しばらく判断を留保したい）。原万葉、原雑歌は、ほぼ人麻呂で終わっている。それは、人麻呂のかかわった歌の書物としての「雑歌」の存在を暗示する。

### 三

隋書経籍志の集部、総集の項には、次のような書名の対応が見いだされる。

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| (1) 賦集九十二卷謝靈運撰        | 雑・賦注本三卷                |
| (2) 詩集五十卷謝靈運撰         | 雑・詩七十九卷江還撰             |
| (3) 碑集十卷謝莊撰           | 雑・碑二十二卷                |
| (4) 論集七十三卷            | 雑・論十卷                  |
| (5) 詔集区分四十一卷後周歐門學士宗幹撰 | 晉朝雑詔九卷梁有晉雑詔百卷、<br>錄一卷。 |

これによれば、賦・詩・碑・論・詔などの文体ごとに、「一集」と「雑」とが並存する。巻数から見ても、いずれ劣らぬ分量の集録であったと思われる。「詩集鈔十卷謝靈運撰」に対して、同じ謝靈運の撰の「雑詩鈔十卷」のあったことも記されているから、「集」と「雑」とは対等の扱いを受けていたらしい。

また、隋書経籍志に記されている宋太子洗馬劉和注の「雑詩二十卷が、旧唐書経籍志では「詩集二十卷劉和撰」とされ、唐書芸文志では「劉和詩集二十卷」とされる。旧唐書校勘記は、右の「詩集二十卷」について、隋書の「雑詩二十卷」は「蓋即此書。」と述べている。隋書の「雑詩」が旧唐書・唐書では「詩集」となっているのである。「一集」と「雑」とに相通じるところのあった証拠である。

### 四

人麻呂における「歌集」と「雑歌」とは、このような対応関係に

発表要旨（日本における『歌集』の成立）

ある、いわば歌の総集の書名だったのではなからうか。謝靈運において「詩集鈔十卷」と「雜詩鈔十卷」との詩の総集が存したように。

このことは、日本における最初の「歌」の集の成立を考える上で、いろいろ興味のある問題を提起する事実のように思われる。人麻呂の「歌集」と憶良の「類聚歌林」、歐陽詢の「芸文類聚」と許敬宗の「文館詞林」、人麻呂関係の「雑歌」と「歌集」、及び憶良関係の「類聚歌林」と「雑歌」、こういった諸関係の相互のかかわり

も、その一端である。

〔付記〕本発表後、漢書の芸文志に多数の「雜賦」のあることに気づいた。文体別総集の最もはやいものが「雜賦」であったようだ。「万葉集巻第一の

「雑歌」が長歌を主としていることも、「雑賦」との関係が思わせる。

なお、本発表前半の詳細は、大東文化大学東洋研究所の『東洋研究30号』（昭和48年3月発行）に、「柿本人麻呂の『歌集』——その書名について——」と題する論文として発表する。